

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 76: 89-104
Issue date	1899-12-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5476
Right	

まぐろゝや庫裏に酒漣す手燭の灯
 衾運ふ廊下傳ひや宿直の士
 石臼に落葉たまりて凍りけり
 上弦の月見えすくや冬木立
 兵營の敷地は廣き枯野かな
 四五人の遠矢試む枯野かな
 吊したる河豚の眼光る灯かな
 保命酒を船に賣り來る小春かな

雑報

長尾教授を送る

江山秋暮れて風漸く寒し、龍南の風色轉た人を
 して傷心に湛へさらえむる時、長尾教授は突然
 高等師範學校に轉任せらる、教授が本校に職を
 奉せられえ事既に四星霜、倫理に漢文に諄々ど
 して諸生を教へて倦まず、長く諸生の仰く處た
 り、傍ら又、本會擊劍部長とて同部員を誘導
 せられ、且つ屢々玉稿を本部に投して、本誌の

光彩を添へられえ事、又實に僅少に非ざる也、
 今や教授は飄然秋風に駕えて東去せらる、吾等
 撫然として痛惜禁する能はざるを覺ゆ、茲に謹
 みて教授の健康を祈り、聊か追慕の意を表すと
 云爾。

推薦、補欠及び、改選

●長尾●擊劍●部長●辭任●されたるに由り●當部●委員●は其●
 後任を推薦して承諾を得たり

●擊劍●部長●

●松本●教授●

又柔道部委員●白川●彌源●太氏●及び●宮崎●祐助●氏●及び●

全 全 千 全 全 白 全 全

江

楊

擊劍部委員中嶋種吉氏辭任されたるに由り其補
欠選舉を行ひ當選されたる氏名は左の如き

柔道部委員

中村 巖

全

副嶋豫四郎

擊劍部委員

杉町 勝一

又第二學期學寮會長及び炊事委員長は左の如く
改選されたり

學寮會長

吉國 兼三(再)

全副會長

菊池剛太郎(再)

炊事委員長

會計長

於保 乙彦

購入長

吉田久太郎

保管長

藤崎 喜助

柔道紅白勝負概況

十一月十八日柔道紅白勝負を瑞邦館に行ふ。先
には肩銃帶劔武歩を南肥に試み、砲煙彈硝の間
に相見えて呐喊天地も崩るゝが如く、或は野を
分け草を被いて狡兔を嶮山峻岳に逐ひ、以て鬼
神山靈の眠を驚かし、今は瑞邦館裏に我邦固有
の武を試みんとす。余勇猶は在る有り。滿校の諸
子血湧き肉躍る。加ふるに日比熱心なる練習は

更に勇壯なる大活劇を見ることを得ん乎。見よ
五十の健兒は、先を爭ふて演武を望みしに非ず
乎哉。擊柝と共に演武者觀衆盡く集まり、中村
委員は立て新任の挨拶を述べ、併せて新來諸君
の歡迎會を兼ね、茲に紅白勝負を行ふを以て、
舊生徒諸君は勿論、殊に新入生徒諸君は、龍乘
虎搏、大々氣焰を吐かれんことを希ふと、云ひ
終つて壇を下り、紅白西軍の壯士は、短襦半帶
凜然として現はれ出で、肅然たる默禮に十分の
敵意を示し、福原矢野兩氏は、雷の如き喝采を
以て迎へられ、此に壯絶快絶の演武を見ること
を得たり。時に午後二時二十分なりき

紅軍(敗)

白軍(勝)

福原	矢野	片山	清水由
福原	山口	河口	清水由
福原	宮嶋	清水愛	清水由
福原	山元	清水愛	關
佐藤	山元	御厨	關
佐藤	前原	御厨	榎木野
佐藤	清水由	柴山	榎木野
佐藤	清水由	柴山	榎木野
佐藤	清水由	柴山	木下

石河	木下	松隈	中野
百武	中川	副島	中野
白石	中川	鮎川	中野
白石	井井	平田	中野
古賀	村井	平田	熊澤
古賀	今永	岸川	熊澤
古賀	梶谷	中村	熊澤
岩永	梶谷	中村	菊池
八田	梶谷	大野	菊池
八田	須古	戸澤	於保
氏原	須古	戸澤	福地
氏原	眞鍋	戸澤	福地
山邊	増永	吉田	阿部
福嶋	増永	(大將)吉田	(大將)工藤
福嶋	森		

(勝負の概評は中村委員の手になれるものいとおもしろけれども印刷の都合により次號に掲載することとせり)

尙今回の昇級者及編入者は左の如し

吉田久太郎

右三級甲へ

阿部直太郎
右三級乙へ

岸川 太郎 大野 敷衛 於保 庫一
平田 全祐 中村 嚴 戸澤 民十郎
右四級甲へ

福地 周二郎 菊池 剛太郎 副島 豫四郎
右四級乙へ

眞鍋 五男 津田 哲三郎 須古 常六
氏原 均一 八田 千町 松嶋 敬造

(新)林 泰吾(新)熊澤 勁太郎(新)中野 大三郎
(新)嶋田 儀一

右五級甲へ

今井 精一 鶴見 宜清 森棟 賢隆
永沼 秀雄 古賀 傳吉 百武 泰彦
村井 龜二(新)森 隆利(新)増永 元也

(新)山邊 武彦(新)徳嶋 英暉(新)原口 哲二
(新)今永 徹三郎(新)中川 吉郎(新)木下 伊都磨
(新)前原 助市

右五級乙へ

柴山 槐郎 奥村 政雄 樫谷 源吉
(新)白石 茂彦(新)猶木 野異(新)石河 晃三郎

(新)清水由隆 (新)關 泰 (新)御厨規三
 (新)野村 新 (新)山口織之進 (新)大庭忠司
 (新)荒木 廣 (新)山元喜二 (新)大森國吉
 右六級甲へ

(新)永井實宜 (新)河口陸太 (新)片山秀太郎
 (新)清水愛太郎 (新)宮嶋右平 (新)佐藤 適
 (新)山口乾輔 (新)矢野漸 (新)三河彦一郎
 青木 利光

右六級乙へ

午後五時半に至りて勝負終了し勝は全く白軍に
 歸せり是より以上の勝負に於て三人以上に當り
 たるものを優等者と爲し戸張師範より工藤、吉
 田、戸澤、菊池、熊澤、中野、増永、氏原、梶
 谷、古賀、木下、清水、佐藤、福原の十四氏に
 賞牌を授與され次に平田戸澤の兩氏の亂捕あり
 其れより黒帶授與式に移り五甲以上に進級若し
 くは編入されたるものに黒帶を授與され是より
 茶話會に移り歡十分にて散會せしは六時來會者
 は兒嶋雜誌部長を始め二百五十余人

擊劍部秋季紅白勝負概況

夫れ劍道は伎の術に非ずして心の術なり、是故

に、聲々相屬し、擾々相擊つが如きは、末の末
 たる處にして、所謂夫の小人劍なるのみ、勝て
 は誇こり、負くれば怨み、罵詈暴動、身を傷け
 骨を折り、怨を引き毀りを招く等、其害擧げて
 云ふ可からざるなり。夫れ大人の劍を學ぶや、
 心を治す意を鍊るに在り。是故に、疾風飛電の
 如く、一嘯一閃、氷刀空をさつて下ると雖も、心
 機自若として更に動かず。勝敗の數、多くは是
 天、固より深く意に介する所に非ず。見山嶋田
 先生も亦、嘗て中村栗山翁に語て曰く、噪がず
 畏れず、虚を察して進み、實を察しては退く。心
 得手足知らず識らず是に應ず。劍能く人を撃
 つに非ざるなり。心能く人を撃つなり。吾能人を
 撃つに非ざるなり。人能く吾をして撃たざる
 なり。と嗚呼彼の切齒扼腕、猛虎憑河の勇を揮
 つて、比々相亂撃するが如きは、吾人の最も采
 らざる所なり。吾校の劍道に於けるも、亦斯の
 如きなり矣。

十一月廿二日午後二時半より、例に由り新入生
 歡迎會を兼ね、秋季紅白勝負を雨天体操場に行
 ふ。先づ、中嶋師範は、立つて開會の辭を述べ、

雜報子筆を授けて愕然として嘆いて曰く、嗚呼此神聖なる道場は汚れたりと、即ち怫然座を蹴て去る。維日來會者は中川會長、松本擊劔部長、兒島雜誌部長、武藤柔道部長、神谷運動部長、其他、小嶋教授、園教授、等を始め、総員凡そ二百余人、散會せしは午後六時過なりき、叙て當日昇級若しくは編入されたる、氏名は左の如し

昇級者

二級乙へ

井手龍之助

上田

徹

松山

重喜

三級甲へ

今井 精一

川端

八郎

岡山

梁

辻 明

厨

豊

内藤

善助

三級乙へ

糸山 龍一

町田

守馬

須古

常六

辻 時之介

四級甲へ

大木俊九郎

編入者

二級乙へ

澤 友彦

八木虎之輔

山下 三郎

三級甲へ

戸澤民十郎

森 蔭利

萩野 切磨

三級乙へ

岩澤 清水

岩永 巖

吉田久太郎

石田 收藏

奥名滋次郎

堤 太三郎

末次 精一

藤崎 才三

廣松 正雄

増原 兵太

俵 元重

吉田 博

測野 幾平

入水 新七

四級甲へ

大野 數衛

澤村 榮美

彼末 利平

常吉 德壽

赤木 歌吉

關 泰

多田 吉鐘

中嶋

岡本 松喜

久家平三郎

松村 龍夫

四級乙へ

阿形 輝司

天野壽太郎

田尻眞太郎

金崎 次平

御厨 規三

五級甲へ

鹿江 榮虎

岩崎 文治

佐藤 適

河口

園田

有吉新太郎

大谷 彬亮

又當日の勝負の結果によりメダルを得たる人々
左の如し

山下 三郎 森 蔭利 松山 重喜

吉田 博 戸川民十郎 須古 常六

中村 貞重 岩澤 清水

演説部例會

演説部十一月の例會は、廿四日午後六時半より
例により瑞邦館に於て開かれたり。先づ當日の
演題を記載せんか。

政黨論

平山 廣

書生の政治的勢力

林田 操

樂天觀

三澤 糾

政黨内閣を論ず

萩原玄太郎

偶感

久保 正壽

公共心

常吉 德壽

鐵道の話

柴田 敷授

扱て、開會は六時三十分よりの筈なりしも、例
によりて例の如く、やうく七時前十分にぞ開
會せられける。順により、平山君登壇す。題は
政黨論なり。まづ、政黨の如何なるものなるか
は、政治家は勿論、政治家以外の士と雖も、苟

くも代議政体の下に住する國民たるものゝ、是
非とも知らざる可からざる事なりと説き起し、
全論を總論、歴史、利害、及び結論の四段に分
たれたり。されども、時間三十分の制限ありし
爲め總論のみを述べて以下は他日に譲れり。總
論を分ちて、第一政黨の定義、第二要素、第三
成立の三部に分てり。定義としては古來有名な
る學者が、之に對して下したる數多の定義を列
舉して、要するに政黨とは一定の主義を平和的
手段によりて實行せんとする政治的團體なりと
論ず。其要素とては第一に、其目的が國家の
利害に關する事たるべくして、一家、一族、一
地方にのみ關する事を目的とするは、政黨に非
ず私黨なりと喝破え、古の宗族の政權爭奪は政
黨と稱すべからざるものなりと論せり。また第
二に、其取る可き手段は平和的ならざる可から
ざることを、即ち干戈を動かさずする黨爭は既に
政黨たるの資格を失したりとなし、第三に必ず
主義を有せざる可からず、第四に政治的團體た
るべきことを述べ。以上四要素は不可缺のもの
なりと論しぬ。次で第三に於ては、政黨は如何

なる場合に於て、又如何なる處に於て成立し得るかに就て、土地氣候及び四民の共同心等につきて詳論し七時廿分壇を下られたり。論議秩序あり、時に奇矯の警句を吐く、流暢滑脱は蓋し君の長ずる所なるべし、好弁士至囑々々。

次に登壇したるは林田君なり。書生の政治的勢力てふ演題の下に、書生は理論上及事實上に於て社會の偉大なる原動力たる事を述べらる。先づ社會はさながら大車小車轉々とまて運轉活動せる機械場の如しと説き出さ、而て此の複雑なる社會機關の中殊に政治機關の運轉を論じて其原動力のある所をたづね、或は宰相か、或は大臣か、或は政黨か、軍人か、商人か、學者かとい問又一問、終に、社會の裡面に隠れて世人嘲笑の目的となり悲歌激越僅に自ら悶を遣る書生なる一奇物を抽出して、之が却て政治社會の大原動力たるを論ぜられたり。例證豊かならず、論旨必ずしも斬新なりとす可からざれども、音吐雷の如く、昂々たる氣既に聽者を呑む、奔逸騰躍、駿馬に乘して驀地敵營を衝くの概ある、宜なりと云ふ可也。

次は、三澤君の樂天觀なり。諄々數千言、説き去り説き來りて些の滯滯を見ず、激流奔放の奇はなくとも、百川洋々の趣は則ち之あり。老手と云ふべし。君は先づ人生の目的は如何なるものなるかを概論して、天授の仕事を作すために生れたりとし、中庸の所謂天之命謂之性、率性謂之道の天道を享有するこれ人生の目的なりと云、之より厭世思想の起る憂さつらさの原因たる病、貧、艱難、失敗、世の腐敗、老、死の中にも猶吾人は天道を享有して、世を樂み、人生の目的を果すを得ることを述べられたり。條理井然、加ふるに明晰なる言語を以てせられたれば、此種の演説には上乘のものたりしや疑ひなぞ、就中、世の腐敗に對する吾人の覺悟吾人の積極的職務を論せし時などは、世の不埒なる厭世家をして愧死せしむるに足る。敬服々々、右終るや八時廿分、萩原君登壇、題は平山君のと似たる政黨内閣論なり。論を其成立、古今の異同、文明に正比例して盛となること、及び其利害の四に分てり。平山君のに反して辨舌流暢ならず、急促にして明晰を缺ぎ、論旨もやゝ漠

然たるを免れざりては甚だ遺憾とする所なりき
次には久保君登壇せり。先づ宇宙の現象極めて
不可思議なりと喝破きて、何だかわからぬと云
ふ事述べられたり。唯惜む、わからぬといふ事
を説く、君の説も、終にそのわからぬ數に洩れ
ざりし事を、宇宙の眞理は未だ秘密なり、宇宙
の理法は未だ不可思議なり、此間に在りて秘密
を説き不可思議を唱ふ未だ必しも不可とせず、
唯其不可思議と唱ふる説のまた不可思議なるに
至りては、吾人また何をか云はん。中段に人間
の希望の徒らに大なるを述べ、終りに世界の
勢らしき事を述べられたれど、吾人終に其要領
を得る能はざりき。

次に常吉君公共心と云ふ題を提けて壇上に現は
る、公共の利益を享くる權利あるものは、公共
のために盡すの義務ありとの論旨を以て我
校學生の通弊を論ずること痛切なりき。

最後に柴田教授登壇せらる。先づ、世には余り
普通なるが爲めに其効用か世人に知られざるも
のあり道路即ち之なりと説き出きて、交通機關
の設備が政事上、軍事上、經濟上其他社會百般

の進歩を促すこと甚だ大なることを論じ、次
て此交通機關中鐵道につきて、我國の鐵道が歐
米のそれに比して、速力に於ても設備に於ても
甚だ不完全なること、及び此等を完全にするこ
とが如何に社會百般の事業に利便を與ふるかを
極めて詳細に説きて、壇を下られたり。詳細の
事は他日本誌に掲載を乞はんつもりなり。

弓術部射納式

世の中やうく開けゆきて、大砲小銃など發明
せられしより、古人のたならしたるけんみたら
しの月、はるてふことは、ふる事にのみ聞きて
あはれや、秋の扇と共に、塵深き所に、閑ちて
めらるゝに至りぬ。されば、落花を惜み之名古
晉の關、紅葉を散らし、屋島の浦の義家宗高が
籠の矢も、春花秋葉と共に散りて、再び見ぬ世
の夢となりしを、その本を忘れじと、月矢の
道再び世に廣まり、治まれる御世のためしにひ
き出で、弦の響を萬歳の聲と聞くに至りしは
喜ぶべき事にこそ。

己亥の年の秋くれて、冬も半となりにけり。頃
は十二月はじめの四日、千代のまらへの松風に

ひやくゆづるの音高き、たつたの山の麓なる例の射場にて、射納式は擧げられたり。生駒、東の兩師範はいふもさらなり、校長、松山部長園嶋野、緒方。能勢の諸先生をはじめ、來賓としては、吉田流にて其の名鏘々たる富田又太郎氏生徒にては、平田、今井、柴山、野村等さきに武徳會の演武にて、大々的氣焰をはかれし面々より、内藤、山口、磯、稻川等の諸老將以下一かどの腕あるものゝみなれば、花々々き競射なりけるが、金昴は稻川君の掌中に落ち、次きは七寸昴の競射となりぬ。甲進み、乙退き、一組射、二組たち、三組射かへて、一組にうつり入れかわり立ちかわり射たる様、雄々しくも、又た殊勝なりきが、その結果、一等は今井君富田氏に譲つて二等今井君、三等園教授、四等内藤君、五等校長、六等生駒師範、七等東師範、八等杉山部長、九等野村君、十等嶋野氏、十一等磯君、十二等稻川君、十三等矢野君と定まりぬ。次は色的の點取競射にうつる金星を射て得意顔なるもあり『中り黒』の矢取の聲に不平顔なるもあり日全く暮れて、昴の所在も分明ならず、

聲を尋ねて射るべきにもあらざりしが、其勝利者は、一等内藤君、二等今井君、三等山口君と定まり、こゝに競射全くやみ、前記の各勝利者は、輝々たる燈火の下、耀々たる光榮を負ひて、優美高尚なる盃の賞を得たり。あはれ己亥の年こゝに穩かに過ぎ來りて、歡聲笑語和氣霽然たる裡、弓は袋に納まりぬ、これひとへに治まれる御世の德澤なり。思ふに、此日の勝利者は、意氣揚々、この名譽の盃をあげて、この太平の世を謳歌せよならん。

士の斯の道に志すもの、年一年を追ふて多く、こゝに盛大なる射納式を擧ぐることを得るに至りたるは、該部の爲大に祝すべきなり。丈夫しばらく爾の弓をゆるべ、爾の心を養ひ以て更に大に爾の伎を練るべき卅三の春光を俟て

馬場彌吉君逝去

福岡縣人馬場彌吉氏は、去る三十一年を以て本校二年に入學せ、信倨黽勉學事に余念なかりしが、本年五月より肺炎に罹り、休學えて福岡病院に入り、專向其治療に手を盡されたと、天命如何ともする能はず、去る十一月三日

を以て遂に逝かる、嗚呼先には石川君を失ひ、
今又馬場君を失ふ、天外漠々雲深き所、嗟々ど
えて孤雁なく、吾人豈涙なからんや、久留米平
原露深き處、東嶺北嶺起伏濤の如く、北辰東月
光明自から薄し、半夜千歲川流止み、橋上の黒
蛇猛然として起ち、笛聲雷の如く、音四山を動
かし、疾風軒を掠めて去る、嗚呼是君の故郷、
芳魂尙くば靜に眠れ、

川村茂民君逝く

凶筆揮ひ來つて、尖毛將に禿せんとす。而も訃
音は陸續到つて止まざるなり。嗚呼何たる不祥
事ぞや。先には高知縣人石川君、福岡縣人馬場
君相次で逝き、今又高知縣人川村茂民君逝く。
氏生を安藝郡西分村に受け、郷校にれへ、來つ
て學を本校三部に攻すること、既に三年、卒業
の期亦近きに及んで、一朝魔兒の襲ふ所となり、
終に逝く。

氏性剛毅にして、學事に勤勉に、側ら擊劔漕艇
を能くす。現に三部の漕手撰手たりき。氏體軀
肥滿、丈優に五尺六寸を越え、一見其氣慨以て
共に語る可きを知る。氏が病にあふりたるは、

十一月二十四日頃にて、病症は腸加答兒とも云
ひ、校醫は神經痛とも云ふさしたる重症にも有
らざれば、命にかゝる氣づかひもなしと思ひし
よ、去ぬる二十八日、夕陽金峯の陰に匿れんと
するをりより、遽に痛を増え、通夜眠りも出來
ぬ程なりしが、朝來少しく痛を減じ、談話も常
にかわらぬ程となりしに、十時頃となり、悠然
眠るが如く、去つて黃泉の客となれり。嗚呼、
先きの暫時の安息は、將に消へなんとする燈火、
最後の一明、いまはの一息にて有りけるか。
氏の故郷には、父無く、兄弟なく、又た姉妹も
なし。唯だ悄然とえて、燈火明滅仄暗き所に、
孫子成業の時を、一日千秋の思ひにて、何時か
くんと待ち詫びつゝ、家内さびしき衾衣の裏に、
物思はせ給ひつらん老祖父老母は、今宵果えて
如何なる夢をか結び給へる、嗚呼、體軀の壯強
は、必ずしも命の長を保證せざりつるなり
於是、高縣人一同は、十二月一日を以て、内坪
井なる本光寺にて、回向を爲す、會葬者には黒
本校長代理、上田三部監督、青木、小島、須藤
二宮の諸教師、及び中島、島野、堀生徒課掛を

始とて、龍南委員、三部三年生一同、星江俱樂部員一同、同寮員一同、其他氏の友人等狹からざる堂宇に、寂とて頭を垂れて坐す。嗚呼夫の長方形の柩、彼の中に横はるものは、抑も何にて有るか。共に語り共に遊びし、生血淋漓たりし四體、今は既に無情無言の枯物となりて有るか。其の上に蔽ひたるは、生時氏が肩を離れざりし最愛の外套、毛色破れ目までも、もとの如くさだかなるに、肩にしつる君は、又見るに由なくなりぬるか、寂たる式場は忽ちにして、壯嚴なる老僧の聲に因つて破らる、曰く『算に入るは此の依るなきの一靈、今去つて大聖の膝に在り』と、手を執つて共に語りつる友人は、堂上に滿ち／＼て在りたるに、去つて眞如の境に入れば、嗚呼君依るなきの一靈なるかや。幽玄なる讀經の聲、壯嚴なる引導に次いで、高知縣學生總代岡上梁氏、龍南會總代常吉德壽氏、三部三年總代於保乙彦氏、星江俱樂部總代安部實作氏、其他樫谷源吾氏の吊詞有り。次て再び讀經に移り、焼香となり、式終るや、同縣學生の芳志として、一包の菓子會葬者に贈り、柩

を送つて上河原の焼骨場に到り、一應の讀經を終り、骸を燒臺に移えて散歸せり。雲を凌ぐ煙突の上より、團々とて立ち昇る煙は、そも何をか意味する。魂魄既に去つて、遺骸猶ほさだかなり。上河原の煙、一たび立つて、殘る所は抑も何物ぞ。嗚呼、消え去り消え去つて、歸する所は一握の灰。昨は手を携へて切磋琢磨し今は幽冥境を異にす。氏の魂魄今何處にか有る先には六尺の體、血湧き肉躍る。今は無情一壺の土、氏が老祖父老母は、抑も如何にして之を迎ふるか。二十年來の夢去つて茫々。嗚呼此鰥寡を如何せん。

嗚呼河口君

嗚呼、悲哉。我が河口敬信君は、去月三十日正午と云ふ時を以て、遂に復た見るべからざるの人となれり。吾人は君が肋膜炎に罹りて、床上の人たるは、兼て聞きし所なり。君が病魔を驅りて、早く昇校の日あらむことは、吾人が深く待ち乞所なり。然るに何ぞ計らん、悲風一陣、秋の木の葉にあらぬ身の、果敢なくも散り失せむとは。嗚呼、人世の持み難きこと、誠に是の

如きかや。昨日までは、幾多の希望と、有爲の才徳とを抱ける我が君なりと成なり。さるに、今日は既に龍田山麓、冷かなる土饅頭の下に、永眠せざるべからざる我が君となれり。昨日までは、生の考を以て、再び校庭を踏むの時を豫期せつゝありと君が、今日は死の眼を以て、小墓の頂より、校舎を眺めざるべからざるの人となれり。嗚呼、人世の情み難きこと、誠に是くの如きかや。聲は君が耳に至らざるも、吾人は遂に慟哭せざるを得ず。涙は君が坐に落ちざるも、吾人は、遂に號泣せざるを得ず。嗚呼悲哉。』

君が亡骸は、十二月一日午後四時を以て、忠勇なる軍人の靈を祀れる陸軍墓地の下、枯木寂寥たる塋域に埋められたり。時に上河原の火葬場には、淡烟の靜かに登るを見たり。是れ即ち我が川村茂民君が奈昆の烟なり。嗚呼、青雲の志を抱きて、我が校に學べる兩君は、同日同時間を以て、共に不幸の典を擧げられたるなり。あはれ持み難き人世なる哉。吾人嘗て聞く、天は善人に與すと。河口君の如きは、善人と謂ふ可き。事に臨みては、敬を以て、之に處え。友に對え

ては、信[◎]を以て、之に交りえかば、全校生徒之を敬[◎]せざるものなく、之を信[◎]せざるものなかりき。而も志未だ達せずして、夭折せらる。儻くば天道は、所謂是か非か。善も竟に情み難く、惡も深く恐るゝに足らず。あはれ信[◎]じ難き人世なる哉。吾人は河口君の逝去を傷ひと共に、彼の蒼を怨みざるを得ず。天乎天乎、汝は何故に我が河口君を奪はざるべからざるか。君乎君乎、君は何故に不歸の客とならざるべからざるか。傷しや河口君は復た遂に見るべからざるなり。嗚呼悲哉。』謹で吊す。

在寮法科生懇話會紀事

學年の改まりしと共に第一學期の各組幹事の撰學を行ひしに其當撰者左の如き

法三甲	菊池剛太郎	法三乙	常吉 徳壽
法二甲	勝 正憲	法二乙	高橋久太郎
法一甲	藤堂 要彌	法一乙	御厨 規三

第五回紀事

新學年最初の會を十月十三日午後七時半より瑞邦館に開く即規則に従ひ先づ議長の抽籤を行ひしに菊池剛太郎君當撰直に議長席に即して開會

を宣告せ演舌希望者なきを以て直に討論會に移り高橋久太郎君をして討論題意の題を説明せしむ當日の討論題左の如き

貧民救助の可否

高橋君之を説明して曰く此處に所謂貧民とは獨一箇の力にて世の生存競争場裏に角逐を得ざるものを言ひ之に對して國家は救與を與ふ可きや否やと言ふにありと而て勝君等一二の質問ありて愈討論に移れり討論は消極の平山君積極の勝君によりて開始せられ消極よりは高橋君柏木君奥村君積極よりは柳川君戸澤君青木君阿形君野村君豊田君中野君等出て互に相挑み申論乙辰時移るに従ひ舌戰益熾なるの有様なりしも時已に十一時に及びたれば討論終結の議起り議長は是を議論に諮りしに多數なりしかば此處に討論終結を宣告し例により採決せずて直に閉會を告げたりそれより茶話會に移り談笑歟刻にして散會せしは正に午後十二時なりき

第六回紀事

十一月十七日午後七時開會當日は討論に先ちて四名の演説者豫定せありしも事故の爲三名は欠

席漸く吉田久太郎君一名の演説ありたり其論旨左の如し

古の學生と今の學生とを比較するに今の學生は智識の點に於て餘程古に勝り居らんも起居動作より其思想の老成ならざる點等に於て維新時代の所謂學生と言ふものに劣れり其原因は様々ならんも第一古の學生は其時代徳義の社會なりしと年長者又は大人物に接すること多きと又一は其數少なかりし爲互に胸襟を開きて相親むを得る等の利ありしならん然るに現今の學生は若年のもの多く且智識も恰んど今等なれば其間自然と無差別の考へを起せ無責任に陥るの弊あり且又多數なる故悉く相識る不能胸襟を開きて談論することもなく self-indulgence を起すに至る此等は現今學生の通弊にして遂に社會に應ずるに下手なる人となるなり是等は夫に法科生の考ふ可き點なりと思はる

次て余が法科生諸君に對する希望は諸君が判斷力の養成に務められんことなり判斷力の必要は今更言ふを須ひざることなれども其養成の法は致知格物にあり致知格物に務めて心中に一箇

の定規を作り是を以て社會を計り人を計り以て處世の秘訣を得可しと大意斯の如し

討論題　社會に貴族を設くるの可否

出題者勝君の説明に曰く社會とは人類自然の性により相互に結合せる一團體なり貴族とは其功勞により又は門閥により社會より特別なる待遇と權利とを享受する一階級也可否とはこの貴族が社會の進歩發達に關するの利害を言ふとこれより二三の質問ありて直に討論に移る第一に顯はれたるは積極論者恒吉君に於て豊田君は又二に積極論者として貴族の勢なるを述べ貴族の變遷を叙え終に英國の例を引きて貴族の必要を説けり如斯の積極論者の氣概甚盛なりしが僅かに勝君の消極論者として顯はるゝありて其挽勢を挽回せり是より甲論乙駁議論などなくよき立えが恒吉君の再び消極論者として出る等あり興味盡る處なかりしが時の移れるを以て討論終決の議あり由て議長は遂に討論終決を宣告え茶菓の饗ありて散會せしは午後十一時頃なり因に記す當日の議長は柏木有光君出席者四十餘名

冬季休暇中、或は故山に歸つて、兩親に事へらるゝ諸君もあらん、或は千山萬水を踏破えて、名勝舊跡を探らるゝ諸君もあらん、本誌第七十七號は、諸君が絢爛飛騰の文筆に成る、是等の記事を豫期しつゝ有り。

七十七號締切は、來る三十三年一月二十日とす、

明治卅二年
十月
中
圖書增加表

[illegible]